はじめに

「総合的な学習の時間」が創設されたとき、ねらいの最初に記されていたのが、次の一文でした。

(1) 自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育てること。

当時、このような学びこそ、子どもであろうと、大人であろうとかかわりなく、「主体性」ある姿ではないかと思ったものでした。

それは、繰り返される「自ら」という言葉に自立性・自律性を、さらに「主体的に判断」という言葉には真・善・美を含めた判断基準の根源的なものを感じたからにほかなりません。

では、このような「主体性」とは、いったいどのような条件のもとで発揮されるものなのでしょうか。

その正体を探るべく、自分自身のこれまでの長い教師人生を振り返りながら、出会ってきた主体性ある子どもたちと教師たちとのエピソードをまとめたのが本書です。

第1章では、公立学校時代の若かりしときに出会った先輩教師や同僚、さらに切磋琢磨した教師たちが、自分の主体性を引き出してくれたエピソードを紹介しています。

第2章では、公立学校時代に長く研修主任を務めていたときに、教師一人一人の主体性を尊重した校内研修システムの改革に取り組んだ実践を紹介しています。

第3章では、筑波大学附属小学校での担任時代、子どもたちの主体性を育てるためのさまざまな実践を紹介しています。

第4章・第5章では、筑波大学附属小学校の子どもたちや教師たち、そして保護者の方々が、コロナ禍にも負けず「学校を楽しくした」実践を紹介しています。

「子どもと教師が最高の主体性を発揮する」とはどのようなことなのか、本書を読まれた方それぞれが自分なりの「納得解」を見いだし、「楽しくする」という主体性ある教師人生を送るヒントとなれば、筆者としてこれ以上嬉しいことはありません。

令和5年2月吉日　筑波大学附属小学校長　佐々木 昭弘

［目次］

第1章　原点回帰

終わらせた運動会　10
マーチングバンド全国大会への道　12
教育サークルへの参加　16
研究主任としての悩み　23

第2章　教師たちが主体性を発揮できる校内研修

最もクリエイティブな校務　28
校内研究システムへの疑問　31
1　教師は「自ら課題を見付け」ているか　33
2　教師は「自ら学び、自ら考え」ているか　36
校内研究システムの改革　38

1 「スローガン的な研究テーマ」をやめる 38
2 「あいまいな研究評価」をやめる 39
3 「共通の研究内容」をやめる 44
4 「研究という言い方」をやめる 45
5 「仮説検証型の研究」をやめる 48
6 「指導案の定型化」をやめる 50
7 「指導案の事前検討会」をやめる 56
8 「これまでの授業研究会のあり方」をやめる 59
9 「これまでの事後の協議会のあり方」をやめる 61
10 「研究紀要・研究集録の作成」をやめる 64
11 「多様な授業研修会」をはじめる 65
〈ゲリラ型の授業研修会〉 65
〈ショート授業研修会〉 67
〈教材選定研修会〉 69
〈校内研修サークル〉 72
〈オープン授業研修会〉 74

教師の主体性を高める共同研修　75

第3章　子どもたちが主体性を発揮できる学級づくり

楽しくしてきなさい　82
子どもとの契約「め・け・さ・じ」　84
自立への基礎を養う「アサガオ」の栽培活動　89
1　どうして植木鉢に棒を立てるの？　90
2　どうして大きくならないの？　93
3　再チャレンジ！　94
「タヌキ」と「キツネ」の究極の選択　97
「全力」で楽しくする　101
「わかる・できる」で楽しくする　104
「命」の教育　107
1　「命」との出合い　109
2　「死」との出合い　111

第4章　突如、訪れた危機が子どもと教師にもたらしたもの
突然の臨時休校　118
臨時休校中の学習保障　119
臨時休校が明けてからの学校運営　122
第5章　学校は楽しいところじゃない、楽しくするところだ
子どもと教師へのメッセージ　128
動き出した教師たち　130
1　楽しくする〝授業づくり〟　130
2　楽しくする〝学校行事〟　134
3　動き出した保護者たち　138
4　動き出した6年生の子どもたち　141
〈「ミニバザー」プロジェクト〉　142

〈「黒板アート」プロジェクト〉 144
〈「絵馬」プロジェクト〉 146
〈「噴水池そうじ」プロジェクト〉 147
〈遠泳プロジェクト〉 148
子どもたちへのメッセージ 150
子どもからのメッセージ 153
おわりに 158

第 1 章

原点回帰

目の前に立ち塞がった問題を解決するには、組織だけでなく構成員一人一人の主体性が求められます。上司から指示されたことだけを行う（自分では考えようとしない、あるいは他者に判断を委ねてしまう）思考停止状態が大勢を占めれば、組織の活動は硬直化し、臨機応変に対応することが叶わなくなります。

しかし、自らの意思で主体性を維持・発揮するのは、容易なことではありません。そしてそれは、必ずしも能力の問題とは言えないように思います。その人自身の心の置きどころによるところが大きいと思うのです。

端的に言えば、次のとおりです。

問題解決の過程や自分が置かれている環境をいかに「楽しく」できるか

「がんばる」という言葉があります。教育現場でも好んで使われる言葉の一つです。

しかし、私はこの言葉があまり好きではありません。〝本当はやりたくないのだけど、仕方がないから我慢してやる〟というネガティブなニュアンスも含まれているように感じられるからです。ですから、誰かに対して「がんばれ」と言葉をかけるとき（そうすることがあえて必要なときもあります）、何となく相手に無理を強いているように思えて気が引

けます。

そうかと言って、本当であればやりたくないことを、やりたいことであるかのように思い込むことを推奨しているわけではありません。そんなことをしていては心を痛めるだけです。いいことはありません。

それに対して、楽しいかわからないことを、楽しめるようにすることはできます。肝は、「そのためにはどうすればよいか」を考えるポジティブな思考回路を自分のなかに構築することです。

もし組織の構成員一人一人がそのような思考回路を使って情報を共有できれば、いたずらに対立構造をつくることなく、（あえてそう仕向けなくても）議論は建設的になります。のみならず、考えの異なる他者との落としどころが、単なる妥協点ではなく、お互いに思いも寄らなかった新しい発想となって現れることすらあります。

さて、私がなぜ、このような考え方をもつように至ったのかを改めて考えてみると、これまでの教師人生を通じて出会ってきた多くの先輩教師の指導に行き着きます。いわば、先輩教師からいただいたプレゼントなのです（このエピソードは後述します）。

そこで本章では、およそ40年の教師人生の原点回帰を試みながら、（たとえ困難な状況であったとしても）「自分を取り巻く環境を楽しくする」エピソードを紹介したいと思います。

終わらせた運動会

教師になって3年目のことです。私は福島県の小さな小学校で6年生を担任していました。最高学年の担任というわけで、学校行事への協力、児童会活動の推進など、忙しい日々を送っていました。私にとってすべてがはじめて尽くしだったので、無我夢中だったことを覚えています。

さて、運動会が終わり、週指導計画案（週案）に、私は次の反省文を書いて管理職に提出しました。

校庭の後片づけを済ませ、帰りの用意をしてみんなで校庭に出た。そして、子どもたちにこう言った。

「校庭を見てごらん。さっきまで運動会が行われていたことが嘘のようです。これは、あなたたちが片づけたのですよ」

私の言葉に、子どもたちは満足げに帰っていった。

休み明けの火曜日も、朝から運動会の後片づけをした。そして、すべての物を倉庫

にしまったとき、6年生の運動会が終わった。終わったのではなく、終わらせた。

その後、私の手元に戻ってきた週案には、次の言葉が添えられていました。当時の教頭からのものです。

〝開眼〟です。「はじめる、終わらせる」ここに主体性がある。

「時が来てはじめなければならない、時満ちて終わる」では、時に身をまかせているのと同じです。あくまで、「〜という目標のために〜をやる」というふうになっているべきでしょう。

〝終わらせた〟という言葉は、終わらせた教師にだけ言える言葉です。

「開眼」という言葉がすごく嬉しかったことを、いまでもはっきりと覚えています。このときから、「主体性とはいったい何なのか」を強く意識するようになりました。そして、教師の仕事は決して「やらされている」わけではない、どんな仕事であっても自らの判断を介在しているものなんだ、と考えるようになったのです。

マーチングバンド全国大会への道

教師になりたてのころの私は、いわゆるでもしか先生の一人でした。当時はバブル期の余韻が残っていた時代で、求人も売り手市場だったこともあり、〝とりあえず教師になって、自分が本当にやりたいことが見つかったらそちらに移ろう〟などと安易に考えて教師になったのでした。

そのような私をどう見て取ったのか、あるとき、当時の校長が私にこう言いました。

「何か勉強したいことはないのか？　海外以外だったら、どこでも出張させてやるぞ」

当時は出張旅費が潤沢だったこともあり、ある程度自由に出張希望を出すことができました。そこで、学校に届くさまざまな研修会のチラシのなかから「金管バンドフェスティバル研修会」を選んでみました。自分が中学生のとき吹奏楽部に所属していたことが理由で、どちらかと言うと興味本位の選択でした。

「金管バンドフェスティバル研修会」の会場は、東京都の新宿だったと記憶しています。客席に座り、〝みんなうまいもんだな〟などと思いながら子どもたちの演奏を聴いていると、ある小学校の演奏に私は釘づけになります。

それは「ステージドリル」でした。演奏しながらステージ上を動き回り、さまざまなフォーメーションを組んでいくマーチングです。あまりの迫力に、体が震えるほどの感動を覚えました。その瞬間、自分も指導してみたいと強く思ったのです。

勤務校に戻った私は校長室に直行し、挨拶もそっちのけで「校長先生、マーチングを指導したいんです」と直訴しました。いま考えると、若気の至りです。そんな無鉄砲な要望を出した私に向かって、校長は静かに言いました。

「マーチングがどんなものか、私にはわからないので、見せてくれないか」

この言葉を聞いてスイッチが入った私はさっそく、「金管バンドフェスティバル」のビデオを購入して校長に観てもらいました。のみならず、校長と二人で「マーチングフェスティバル」を観に行きました。

フェスの開催地は秋田県でした。当時、秋田新幹線はありませんし、急な話でもあったので特急列車の予約がとれず、往復立ったままの強行軍です。

フェスを観たとき、校長が本当のところ何を感じ考えたのかは測りかねますが、その後の動きは実に迅速でした。予算の確保、楽器の購入、地域での発表の場の確保、保護者にアピールできる場の設定など、あれよあれよという間に条件が整備されていきました。さらに、マーチングを教育活動として位置づけることを目的として、音楽の指導に

長けた教頭（前述の教頭）まで着任させたのです。

実を言うと、マーチングに反対する保護者は数多くいました。その地域ではスポーツ少年団によるソフトボール指導が盛んで、マーチングに練習時間をとられることを嫌がったからです。

しかし、実際にはじめてみると、次第によき理解者へと変わってくれました。マーチングのもつ魅力と、日に日に上達していく子どもたちの姿に感銘を受けたのだと思います。

最初は、金管楽器はトランペットが10台、トロンボーンが2台、鼓笛隊で使っていた古い打楽器、リコーダーと鍵盤ハーモニカだけ。そんな状況を見かねたＰＴＡの役員の方々が、地域をまわって寄付を集めてくれました。おかげで、マーチングに必要な楽器が揃いました。

その後、3年生以上全員の子どもたちで編成した私たちの「マーチングバンド」は、福島県大会、東北大会を通過し、日本武道館で開催される全国大会へと駒を進めたのです。校長への直訴からわずか2年、ちょっと考えられないくらいの快挙でした。

そのようななか、周囲の学校の先生方からよくこんなことを言われていました。

「マーチングの指導、がんばっているみたいだね。でも、時間はとられるし大変じゃな

い？」

そのたびに、内心〝別にそんなことはないんだけどな〟と思っていました。私には「がんばっている」とか「大変だ」などといった意識がかけらもなかったからです。「ただただ楽しい」それだけです。そもそも自分がどうしてもやりたくてはじめたことなのですから。

ただし、「楽しい」と感じ続けられたのは、単に「私自身がやりたかったこと」というだけではありません。そう思わせてくれた周囲の支えがあったからです。

校長の戦略的な学校経営、教頭の組織運営力、同僚の先生方の献身的な協力、保護者の支援があったからこそ、私は自らの主体性を維持・発揮することができたのです。その結果、「私の楽しい」が「子どもの楽しい」へ、そして「管理職や同僚の楽しい」「保護者の楽しい」へと広がっていったように思います。

私がその学校から異動して、20年の月日が流れます。全国大会への切符を久しぶりに手にした「マーチングバンド」は、その大会の出場をもって解散することを決めていました。そのときの校長の話では、マーチングバンドを維持するために、さまざまな困難を抱え、数多くの職員が苦労を重ねてきたそうです。これで一区切りだという判断でした。

時の流れとともに最初の思いや願いが風化し、形だけが残った伝統は、制度疲労を起こしてしまうのが世の習いです。そしてそれは、教育の世界も例外ではありません。

広域人事行政によって教師は数年間隔で入れ替わり立ち替わりです。校区内に大規模マンションが一つ建つだけでも、地域との関係性が変わります。子どもが減っていく状況もあるでしょう。それらに伴って、学校は常に変わり続けます。

最初のうちはどれだけ教育的に望ましいものだったとしても、その目的や意味・価値が受け継がれなければ、教育活動として成立しなくなるのは自然なことなのです。

自分がはじめたマーチングではありましたが、いずれその日が来ることは何となくわかっていたように思います。はじまりがあれば、必ず終わりが訪れます。

何か新しいことをはじめるときには膨大なエネルギーを必要とします。しかし、それ以上に終わらせるエネルギーは、その比ではなかったはずです。

全国大会ではじまり、全国大会で終わらせることができたマーチング…見事な引き際だったと思います。

教育サークルへの参加

教師である私にとって幸運だったのは、授業について語ることが好きな仲間に囲まれていたことでした。お酒の席でも授業を語り、子どもの姿について語ることを憚らない先生たちです。もちろん、お酒の席ぐらい仕事の話をしたくないという同僚もいましたが、そんなことはお構いなし。熱く語り合ったものです。

その一つの場が、同世代の教師と共に立ち上げた教育サークルです。月1回、メンバーの自宅に輪番で集まっては定例会を開いていました。

このサークルには、次の不文律がありました。

- 必ず実践資料を持参して提案すること。
- 持参資料がない場合は、発言は最後に回されること。
- 基本的には褒めない。批判する場合には、代案を必ず示すこと。

まだ若かった私たちにとって、実践資料の作成は簡単なことではありませんでした。しかし、「質」は「量」をこなしてこそ担保されます。繰り返し資料を作成し、提案し、批判する・されることを繰り返しながら、確実に質が高まっていく手応えを仲間とともに体感することができました。

また、誰かの実践を批判するのであれば、必ず代案を出さなければならない約束事なので、うかつに批判などできません。そのような緊張感が伴う議論を通して、研究会での最低限のマナーや技能を身につけることができたように思います。

月1回の定例会後は、必ず食事会を開き、夜遅くまで議論の続きをしたものです。もちろん、仕事とは関係のない雑談で大いに盛り上がることもしばしばでした。私にとって、本当に楽しい時間でした。

私は福島県の教師だったので、転勤は広範囲でした。しかし、どの地区に行っても、志を同じくする教師はいるものです。こうしたことがあって、研修会などに参加した折にはさまざまな先生方に声をかけては仲間を増やし、20年近くサークル活動を続けてきました。その間、ソニー受賞校連盟（現ＳＳＴＡ）や日本初等理科教育研究会の会員にもなり、私の教師人生を大きく変えてくれた先生方と出会うことになります。

年功序列的な意識がほとんどなく、フラットな関係で議論することのできたサークル活動の経験は、間違いなく教師としての私を育ててくれました。懐の深い先輩方との出会いがなければ、いまの自分はなかったと思います。

「幸せになるコツって何ですか？」

これは以前、教え子の一人から受けた質問です。

私は「自分を幸せにしてくれる人と出会うことかな」と答えました。咄嗟の返事だったのですが、いま思い返しても、それほど間違ってはいないように思います。

世の中には、幸せな人もいれば不幸せな人もいます。また、一口に幸せと言っても、さまざまな形があることでしょう。しかし、共通することもあると思います。それは、幸せな人には、自分が幸せになるきっかけを与えてくれる人との出会いがあるということです。

確かに、幸せになるために自ら努力することも大切です。しかし、そうした努力を可能にしてくれるのも、人との出会いです。

おもしろいもので、自分を成長させるべく努力（期間限定ではなく楽しく続けていける、努力とはあまり感じない努力）をしている人には、幸せにしてくれる人との出会いがあります。どうも、神さまがちゃんと用意してくれているらしいのです。

不幸せな人も同様です。犯罪に手を染めてしまった人の多くは、人生をねじ曲げられてしまうような不幸せな出会いがあったのだと思います。

こうした不幸せな出会いは、何も特殊な世界の話だけではありません。犯罪に走るほ